

ヘミングウェイの「射撃クラブ細則パロディ」 —キューバ書き込み資料に記された作家の戦後ノスタルジア

Hemingway's "Parody of the Shooting Club Bylaws":
The Writer's Postwar Nostalgia in the Cuban Marginalia

柳沢秀郎 (名城大学 外国語学部)

YANAGISAWA, Hideo, Faculty of Foreign Studies, Meiji University

要約

本稿の目的は、キューバのヘミングウェイ博物館所蔵の「書き込み資料」(marginalia) のひとつ、「6-6605」の判読と分析を通して、そこに読み取れるパロディ化された射撃クラブの細則のなかに戦後のヘミングウェイの胸中に存在した懐古的アイロニーを読み取ることである。

キューバ在住期、狩猟愛好家のヘミングウェイは近所の射撃クラブ「クラブ・デ・カサードレス」に頻繁に通っていた史実があるが、おそらくヘミングウェイはその射撃クラブの会則に追記する体で、全 8 項からなる架空の細則を、ジョークとアイロニーを交えて創作したと思われる。ヘミングウェイによるこの「射撃クラブ細則パロディ」には、ジョークによって巧みにカモフラージュされた作家特有の男性ホモソーシャルなコミュニティへの希求、および第二次大戦で戦った兵士たちに対する敵味方を超えた同胞愛、そして戦後のヘミングウェイ自身が抱えていたノスタルジアの存在を読み取ることができるのである。

The purpose of this paper is to interpret and analyze "6-6605," one of the marginalia in the Hemingway Museum collection in Cuba, which contains parodied bylaws of Hemingway's shooting club, in order to observe the sense of nostalgia and irony that remained in Hemingway's mind after the war.

Hemingway, a hunting enthusiast, frequented the nearby shooting club, "Club de Cazadores," when he was living in Cuba. Hemingway appears to have created fictional bylaws for this club, consisting of eight paragraphs, with humor and irony. Hemingway's "parody of the shooting club bylaws" shows the writer's peculiar desire, hidden behind the jokes, for a male homosocial community, as well as his love for the soldiers who fought in World War II, which transcended friend and foe, and reveals the nostalgia that Hemingway himself felt after the war.

キーワード: ヘミングウェイ, 書き込み資料 (marginalia), 蔵書研究, 射撃クラブ

1. はじめに

アーネスト・ヘミングウェイの戦後小説『河を渡って木立の中へ』(*Across the River and into the Tree*, 1950) において、主人公の老兵ロバート・キャントウェルが「結社」(Order) と呼ぶコミュニティ・サークルを作っていたことが示唆されている。初期冷戦期を生きるキャントウェルとコミュニティの退役老兵たちは、このサークルを通して過去の戦争をジョーク交じりに懐古するのであるが、このノスタルジックなサークルを彷彿とさせるメモがキューバのヘミングウェイ博物館所蔵の書き込み資料に存在する。書籍の表表紙と裏表紙の空欄に鉛筆によって書かれたこの書き込みには「クラブ」(The Club) という射撃クラブらしきコミュニティの細則がジョーク混じりに列挙されているのである。

本稿の目的は、キューバのヘミングウェイ博物館所蔵の書き込み資料のひとつ、資料「6-6605」の判読と分析を通して、戦後のヘミングウェイの胸中に存在した懐古的アイロニーを読み取ることである。

2. 資料「6-6605」

ヘミングウェイ博物館には「6-6605」とナンバリングされたヘミングウェイによる書き込み資料がある。書き込みが施されているのはフランス語で書かれた著書『イタリアの日々』(*L'Italie au jour le jour*) (図1)。出版情報“Edition Notice”からもわかるように 1949 年にパリで出版されたこの本は、フランスの文芸批評家ロジェ・ランヌ (Roger Lannes) によって書かれたもので、彼はジャン・コクトーとも親交のあった詩人でもある。本書はランヌによるイタリア旅行記であるが、寄贈されたものか購入されたものかは今のところ不明である。¹ また、後述するようにヘミングウェイの書き込み内容との直接的な関連も今のところ認められない。

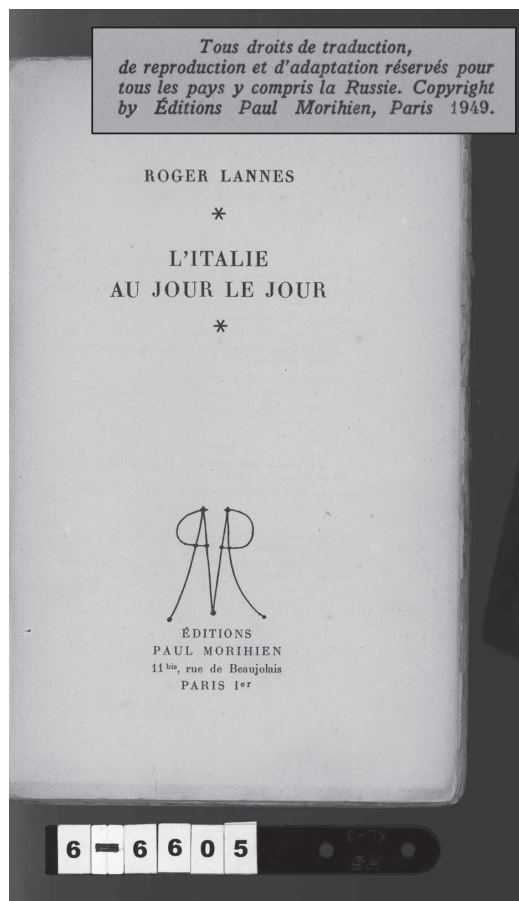


図 1 「6-6605」の Title Page と Edition Notice

3. 「6-6605-Last Page」

書籍資料の Last Page には、フランス語で印字されたもう一つの出版情報（印刷所やカバーデザイナーなど）を囲むように、ヘミングウェイによる書き込みが紙面を埋めている（図 2）。その出版年から、おそらく 1949 年あるいはそれ以降にヘミングウェイが書いたこの記述の英語翻刻は次のように和訳できる。

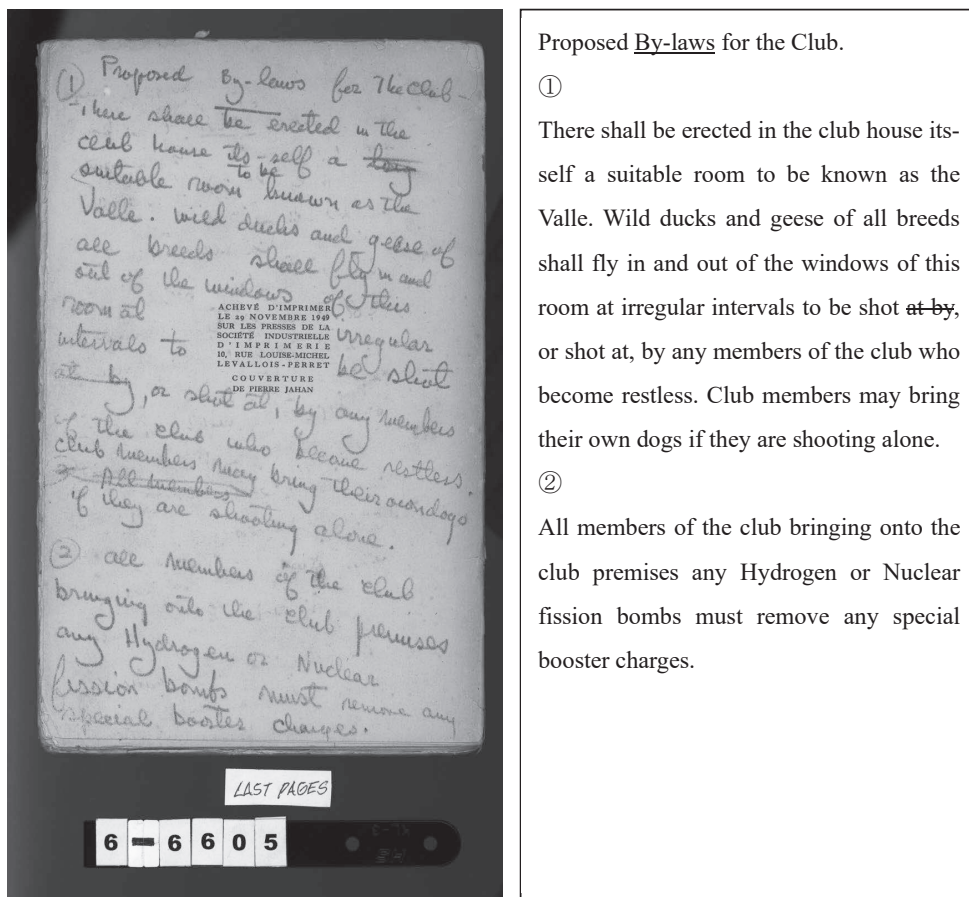


図 2 「6-6605-Last Page」

クラブ細則（案）

①

クラブハウス内に、「溪谷」と称して適当な部屋を設けるものとする。あらゆる品種の野生のアヒルやガチョウが不定期にこの部屋の窓から出入りし、落ち着かなくなった会員はだれでもこれを狙い撃ちしてよい。会員が単独で射撃する場合は、自分の犬を連れてきててもよい。

Proposed By-laws for the Club.

①

There shall be erected in the club house itself a suitable room to be known as the Valle. Wild ducks and geese of all breeds shall fly in and out of the windows of this room at irregular intervals to be shot ~~at by~~, or shot at, by any members of the club who become restless. Club members may bring their own dogs if they are shooting alone.

②

All members of the club bringing onto the club premises any Hydrogen or Nuclear fission bombs must remove any special booster charges.

②

クラブの敷地内に水素爆弾または核分裂爆弾を持ち込むクラブ会員は、特別なブラスター・チャージを取り外さなければならない。(6-6605-Last Page, my translation)

「クラブ細則（案）」という書き出しで始まるこの記述は、その第1項と思われる内容から判断して、おそらく射撃クラブのような組合組織が有する細則項目であると思われる。射撃クラブといえ、およそ20年におよぶキューバ在住期、狩猟愛好家のヘミングウェイが足しげく通っていた射撃クラブ「クラブ・デ・カサードレス」(Club de Cazadores)がある(図3)²。この射撃クラブの会員であったヘミングウェイは、邸宅であるフィンカ・ビヒアから3キロほどの距離にあった地の利を生かし(Baker, C. *Life Story* 488)、家族や友人を連れて事あるごとに鳩撃ちを楽しんでいたという。³ おそらくヘミングウェイは、この射撃クラブの会則に追記する形で、全8項からなる細則を創作したと思われる。



特筆すべきは、この細則には多くのジョークが散見され、通常の射撃クラブのイメージから大きく逸脱しはじめる点である。例えば、細則第2項まで読み進めると、会員によるクラブハウスへの持ち込み物件として「水素爆弾や核爆弾」(Hydrogen or Nuclear fission bombs)に触れられている。しかも、その射撃利用を可能にする特殊な装填装置をおそらくは銃砲から取り外すことを義務付けている。核兵器をジョークのネタとして用いるこうした言及は、1940年代後半のヘミングウェイの伝記や書簡、また同時期に書かれた小説にも認められる。⁴ したがって、これらがジョークを用いた架空の細則であることは間違いない。細則項目をさらにたどってみよう。

4. 「6-6605-Back cover Page」

つづくBack cover Page 1には、第3項と第4項、および第5項の途中までが書かれているのがわかる(図4)。第三項と第四項の英語翻刻を和訳すると次のようになる。

③

ディエゴ・ベラスケス氏をクラブの専属画家に任命し、全会員の全身肖像画を馬、犬、猟銃などと一緒に**わずかな金額で**描いてもらう。これらの肖像画は**わずかな金**

額で描かれるべきであること。

④

レディースデーは、各世紀末に当クラブで祝われる。創設会員は、性別に関係なく、常にジェントルマンとして扱われる。(6-6605- Back cover Page1, my translation)

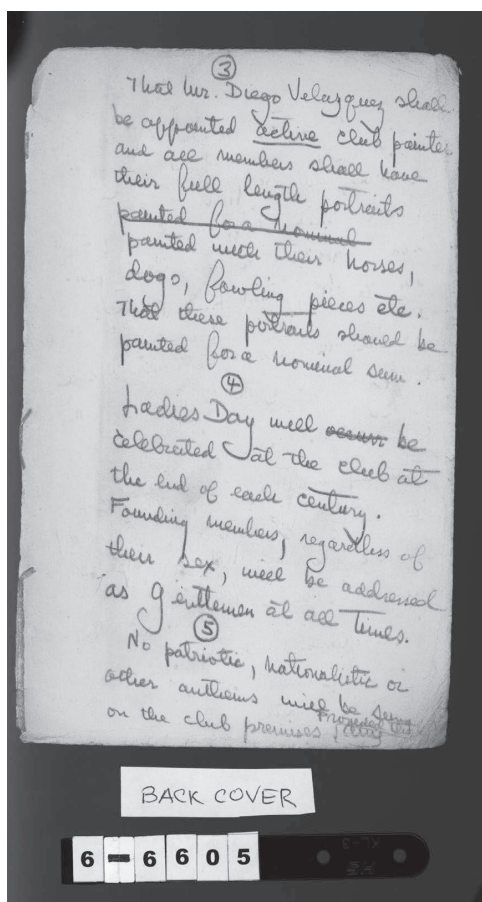


図 4 「6-6605-Back cover Page 1」

「ディエゴ・ベラスケス氏」(“Mr. Diego Velazquez”)とは、十七世紀を代表するスペイン画家である。したがって、すでに存命していない画家を射撃クラブの専属画家とする時点でジョークなのだが、⁵ 宮廷画家として辣腕をふるったその生涯を勘案し、クラブ専属画家として用いたと思われる。いうまでもなく、名だたる画家を安価で利用する点もアイロニーを狙ったものだ。

続く第 4 項、ヘミングウェイは、この射撃クラブにおける「レディースデー」(“Ladies

③

That Mr. Diego Velazquez shall be appointed active club painter and all members shall have their full length portraits ~~painted for a nominal~~ painted with their horses, dogs, fowling pieces etc. That these portraits should be painted for a nominal sum.

④

Ladies Day will ~~occur~~ be celebrated at the club at the end of each century. Founding members, regardless of their sex, will be addressed as gentlemen at all times.

⑤

No patriotic, nationalistic or other anthems will be sung on the club premises. Provided that any

Day”)の扱いについて記述する。「世紀末ごと」 (“at the end of each century”) という非現実的な頻度を設けることによって、安易な女性優遇をジョークによって揶揄している。また、クラブの「創設会員」 (“Founding members”) は性別に関係なく「紳士」 (“gentlemen”) として扱われるという記述にも、ヘミングウェイ好みの男性中心主義的な論調が表れている。

途中で中断されている細則第五項は「続き」 (“continued”) という書き出しで始まる次頁の条項と接続して訳出する (図 5)。

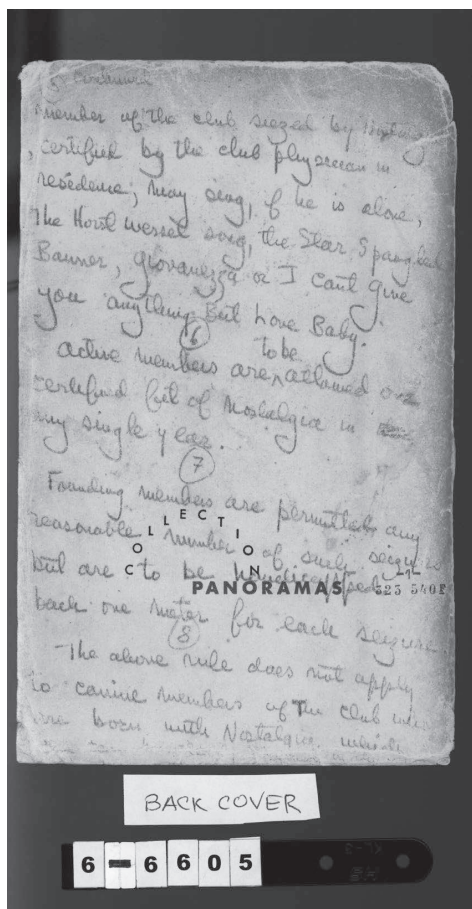


図 5 「6-6605-Back cover Page 2」

continued

⑤

member of the club seized by nostalgia, certified by the club physician in residence, may sing, if he is alone, the Horst Wessel song, the Star Spangled Banner, Giovanezza or I Can't Give You Anything But Love Baby.

⑥

Active members are to be allowed one certified fit of nostalgia in any single year.

⑦

Founding members are permitted any reasonable number of such seizures but are to be handicapped back one meter for each seizure.

⑧

The above rule does not apply to canine members of the club who are born with nostalgia, which...

⑤

クラブの敷地内では、愛国的、民族的、その他の讃美歌を歌ってはならない。ただし、ノスタルジアにとらわれた会員で、クラブ常駐の医師の認定を受けた者は、一人の場合、『旗を高く掲げよ』、『星条旗』、『ジョバネッツァ』[『ジョヴィネッツァ』]、『アイ・キャント・ギブ・ユー・エニシング・バット・ラブ・ベイビー』のいずれかを歌うことができる。

⑥

正会員は、1年に1回、認定されたノスタルジアの発作を許される。

⑦

創設会員は、こうした発作を妥当な回数許されるが、1回の発作につき1メートルのハンディキャップを負うこととする。

⑧

上記のルールは、ノスタルジアを持って生まれてきた犬の会員には適用されない…
(6-6605- Back cover Page1-2, my translation)

この第5項冒頭において、ヘミングウェイは国家や民族を標榜する曲の歌唱を禁じておきながら、「ノスタルジアに襲われた会員」(“member of the club seized by nostalgia”)には特例を許すと記している。注目すべきは、ノスタルジアをまるで退役軍人らを蝕む病症のように扱うジョークによってアイロニーを引き出している点である。そしてこのジョークは、そんな彼らの治療薬が、第二次大戦で彼らが所属していたかもしれない国の国歌や党歌を歌うことだとする示唆によって、さらに強められている。ヘミングウェイが治療薬として挙げた曲は、ナチス党の党歌『旗を高く掲げよ』、アメリカ国歌『星条旗』、イタリアのファシスト党の公式賛美歌『ジョヴィネツァ』、そして、大恐慌前の古き良き時代に流行ったアメリカのジャズソング『アイ・キャン・ギブ・ユー・エニシング・バット・ラブ・ベイビー』⁶である。

第6項と第7項にかけては、「ノスタルジア発作」(“fit of nostalgia”)という本来は制御困難な感情の発露に許容回数を設けることによって、あたかも会員種別による射撃回数の増加特典でもあるかのように扱うことで生まれるジョークを作り上げ、第8項では会員に犬も含めることによって、更なるジョークを生み出しているといつてよい。

このように見てみると、この書き込み資料は、ヘミングウェイによって創作された射撃クラブ「細則」のパロディにほかならない。しかしながらこのパロディには、ジョークによって巧みにカモフラージュされた作家特有の男性ホモソーシャルなコミュニティへの希求、および第二次大戦で戦った兵士たちに対する敵味方を超えた同胞愛、そして戦後のヘミングウェイ自身が抱えていたノスタルジアの存在を読み取ることができるのである。

6. おわりに

ヘミングウェイによる書き込み資料「6-6605」に記録されている射撃クラブが彼の御用達であった射撃クラブ「クラブ・デ・カサードレス」を指しているのかは推測の域を出ない。しかし重要なのは、ジョークとアイロニーがふんだんに用いられて創作されたこのへ

ミングウェイによる「射撃クラブ細則パロディ」が、実は戦後である 1940 年代後半のヘミングウェイ自身のノスタルジックな心境を逆説的に物語っている点である。

本論で明らかとなったパロディとノスタルジックの関係がヘミングウェイの創作にどう関わるのかについての具体的な考察は次稿に譲ることとする。

謝辞

本研究は、JSPS 科研費 (JP25580069、JP26580059、JP16K13207) の助成を受けて実現したものである。キューバのヘミングウェイ博物館での研究活動の成果に基づいている。2014 年から 2017 年の 3 年間におよぶ「蔵書の書き込みデジタル化プロジェクト」に協力いただき博物館関係者、および本稿で使用した資料の判読にご助言くださったグレゴリー・マイネハン先生に心から感謝を申し上げる。

注

- ¹ ランヌは 1949 年 2 月 11 日から 6 月 9 日に及ぶイタリア旅行を日記にしたため、イタリアの戦後復興のようすを子細に報告している。
- ² シルビオ・カラビの著書 *Hemingway's Guns* より転用 (Calabi, S. 88)
- ³ バイカーの伝記を参照 (Baker, C. *Life Story* 364, 367, 384, 451, 508)。
- ⁴ ヘミングウェイと核兵器の関係、および作品への影響については、柳沢の著書の第 5 章「戦場へのレクイエムー「原爆ジョーク」と『河を渡って木立の中へ』」を参照。
- ⁵ ヘミングウェイ博物館には闘牛をテーマに描いた同名のスペイン画家エウジェニオ・ルーカス・ベラスケス (Eugenio Lucas Velázquez, 1817-1870) の作品が複数所蔵されている (Hemingway, C. 61, 62)。
- ⁶ ジミー・マクヒュー (Jimmy McHugh) 作曲、ドロシー・フィールズ (Dorothy Fields) 作詞で 1928 年にアメリカで発売されたスタンダード・ジャズ。

引用文献

- Baker, C. (1969). *Ernest Hemingway: A Life Story*. Scribner's.
- Calabi, S. (2016). *Hemingway's Guns: The Sporting Arms of Ernest Hemingway*. Guilford.
- Hemingway, E. (1950). *Across the River and into the Tree*. Scribner's.
- , “6-6605.” The Ernest Hemingway Museum, Finca Vigía, Havana. (n.d.).
- Hemingway, C. (2009). *In His Time: Ernest Hemingway's Collection of Paintings and the Artists He Knew*. Kilimanjaro Book.
- Lannes, R. (1949). *L'Italie au jour le jour*. Paul Morihien.
- 柳沢秀郎 (2020) 『アーネスト・ヘミングウェイ 日本との出逢い、中国への接近』(現代図書)